

張一兵著『マルクスへ帰れ—経済学的コンテクストにおける哲学的言説—』(中野英夫訳、情況出版、2013年)

—<疎外>と<物象化>をめぐる—

角田史幸

著者張一兵氏は、現在、南京大学共産党委員会副書記、同大学マルクス主義研究院院長の職にあり、マルクス主義は無論のこと、ラカン、アルチュセール、アドルノ、ハイデッガー等に関する著書を著している。マルクス主義研究のいわば正統的立場にしながら、他方で同時に現代思想が問題にしてきたテーマ、つまり主体の複数性や非連続性、多様態へと開放される「否定性の弁証法」(アドルノ)というようなテーマにも通暁している現代哲学研究者の姿が思い描かれる。そのような氏の研究の本筋とも言うべきマルクス主義研究を代表する著書が1998年に著され、2013年に700ページ近い大著として邦訳された本書である。本書には『マルクスへ帰れ』という表題が付けられている。実は、本論稿の筆者(角田)は、まさに同じ表題の訳書『マルクスへ帰れ』ⁱを翻訳出版している。著者マシミリアン・リュベルは西欧マルクス学研究を代表する碩学であり、リュベルの主張ⁱⁱを体現するために『マルクスへ帰れ』という表題を邦訳に当てた事情があった。今回奇しくも、同じテーマ(同じ表題)の著書と出会ったことになる。まさに、その同じ視点から、張一兵著の本書が「本当にマルクスへ帰っている」のかを検討しなければならない。そのために、最初に、「マルクスへ帰ること」の意味を張氏がいかにつえているかを見てみよう。

張氏自身の言葉を借りるならば、「マルクスへ帰る」こととは、「マルクスのオリジナルの文献研究の科学的準拠枠」ⁱⁱⁱに立ち帰ることを意味する。もちろんその背景には、「過去1世紀半にわたるマルクスの思想の解釈とその評価は、総じて、スターリン式教条主義イデオロギーの枠組みの長い影から抜け出すことはできなかった」^{iv}事情があり、その負の遺産としての「旧ソ連・東欧の公的なイデオロギーによる解説や政治的実践の失敗」^vという桎梏から脱して、マルクス自身のオリジナルな草稿に基づきその原思想を復原する、という作業が今求められている。とりわけ、「資本主義のグローバルな勝利という幻想」が「急激に自己崩壊し始めた」^{vi}今こそ、マルクス思想研究の「疾風怒涛時代」^{vii}を蘇らせたい、というのが氏の第一の主張なのである。この点、本論稿の筆者もまた、大いなる賛意を覚えるところである。さらに、「マルクスへ帰る」方法として氏が主張する点は、マルクスが心血を注ぎ込んで研究、執筆した膨大な草稿群の内容のほとんどを占める経済、歴史、社会に関するテキスト群、とりわけ経済学的テキスト群の中からマルクスの哲学的思想を抽出する、という方法である。本書の副題が「経済学的コンテクストにおける哲学的言説」となっているのもそのことを理由とする。氏の主張によれば、「マルクスの哲学的言説」や「哲学思想」は、旧来の哲学的言説や哲学理論とはその思索と表現の仕方が異なる。すなわち、マルクスの哲学とは、その思想そのものが直截に何らかの思弁的理論として（例えば〇〇理論として）述べられるのではなく、逆に、経済的、歴史的、社会的限定性と条件を帯びた具体的事象について探究する過程の真っ只中にこそ表現される。従って、マルクスの残した膨大な草稿群、「マルクス経済学研究の深層のコンテクストの中から」^{viii}こそ、哲学思想が探索されるべきだ、というのが氏の主張なのである。「マルクス経済学研究のコンテクストからその哲学理論の発生を透視する」^{ix}ことが肝要である、と。

このような、張氏の第二の主張にも、筆者は大いなる賛意を覚える。というのも、氏の第一の主張にあったように、かつての旧ソ連・東欧の公的なイデオロギーによる解説の中では、「正統派マルクス主義」、特にスターリンの

『弁証法的唯物論と史的唯物論』等が国家的哲学〔国家教義〕として祭り上げられ、しかも「マルクス文献の精読に人一倍努力したと思われる」^xレーニンでさえ、マルクスが「何十回となく自分の哲学的見解を弁証法的唯物論と呼んだ」^{xi}などと（完全に誤った）妄言をなすほどであった。思弁的「唯物論」への志向性を強く持ち、「唯物史観」「史的唯物論」という造語を作り出し、マルクスの思想に「マルクス主義」という代名詞を冠することに躊躇しなかったのは、マルクスではなくエンゲルスであり、それとは異なって、マルクス自身は、自らの哲学や歴史把握そのものを「〇〇理論」「〇〇史観」のような名称で定義付けようとしたこと（まして世界の発展を全規定するような「法則」として宣揚したこと）は決してなかった。マルクスにとって、それはあくまでも現実の歴史社会探究の「導きの糸」に他ならなかった。さらにマルクスは、自らの思想に「マルクス主義」という自分の呼称を与えることも許さなかった^{xii}。このことは、マルクスの思想の根底を貫く生命線である。

端的に言って、マルクスにとって、哲学という学問の使命は、自ら（哲学）自身の存在を否定し、揚棄することにあった。彼の最初期の論文（「ヘーゲル法哲学批判」）の中ですでに明白に彼は、哲学はプロレタリアートを揚棄することなしには自己を実現することはできない^{xiii}と明言していた。現実の世界における最も深い矛盾、生産手段を剥奪されているがゆえに賃金労働せざるを得ない圧倒的多数の人々の存在という現実の根底的矛盾を揚棄することなしには、哲学は自らを実現することができない。その使命なしには、哲学は空論に終わるしかない。逆に、哲学的理念が何らかの価値を有するとすれば、それは、その理念が観念的抽象的に闡明されるところにおいてではない。そうではなく、いかなる歴史的、社会的条件と限定性においてその理念は規定されているのか、また、その理念が実現可能ならば、それはどのような歴史的社会的条件と限定性によってなのかを探究することにおいてなのである。哲学の理論的探究は、現実の歴史的社会的探究に取って代わられねばならないのである。「哲学者たちはただ世界をさまざまに解釈してきたに

過ぎない。問題なのは世界を変革することだ」^{xiv} という 1885 年のマルクスのテーゼも、ただ解釈のみをこととした「哲学」の外部へと〈哲学〉を転換させること、現実の変革のための条件と可能性を示すことによって変革の行為としての〈哲学〉へと転換させることを意味している。

本稿のテーマとなる〈疎外〉と〈物象化〉という問題に関しては、このことがとりわけ当てはまる。疎外、そして物象化は、マルクスの生涯の思索を「導く糸」として、変わることなく彼の思索を導いたテーマである。もちろんマルクスの草稿の現実の表現形態においては、「疎外」や「物象化」という実際の用語の使用は時期的、場所的に限定されており、それに従って、それらが顕著に表現されるマルクスの草稿も限定されている。また、〈疎外〉にしても〈物象化〉にしても、それがたとえ生涯の思索を導く糸であったとしても、思弁的な哲学理論としてマルクスがそれらを展開したわけではない。マルクスの疎外論や物象化論は、通常の意味での抽象的哲学理論とは異なる。マルクスにとって思索の根底を占める問題とは、常に、現実中存在し活動する人間諸個人、彼らの生活の実態と諸条件、そして彼らが置かれている社会的関係、特に生産的諸関係であった。それらの探究とその思索を導く糸、思索の方法のキーとなるべき概念のうちの 하나가〈疎外〉であり、また〈物象化〉であった。そしてさらに、これが最も大切なのであるが、マルクスにとって最も重要な問題は、疎外も物象化も、現実の賃金労働者階級が置かれている状況を意味する概念であるがゆえに、大多数の人間の生活を根底的に規定する、ということである。疎外も物象化も、単に哲学的理論的なプロブレマティックであるよりはむしろ、現実の資本主義体制の根底的な変革への志向的意思そのものであり、現実への変革的实践を抜きにした単なる理論的概念としては意味をなさない。従って、本書『マルクスへ帰れ』を評価する場合にも、それが果たしてマルクスのこの根本的姿勢を理解しているのか、つまり、理論的問題に関しても、現実の諸個人の置かれた状況からの人間の解放と自由への志向性をその読解のキーとしているかどうかが問題とならざるを得ない。筆者は、本書張一兵著『マルクスへ帰れ』の方法が、マルクス自

身の哲学の姿勢、つまり哲学そのものを揚棄することこそが哲学の使命であると考えた姿勢を理解し、具体的な歴史的、社会的探究のコンテキストの中にマルクスの哲学を読み取る方法を取ったことに賛意を覚える。しかし同時に、上述の点で、マルクスの真意を本当に汲み取っているのかどうか、重大な疑問を呈する。つまり、『マルクスへ帰れ』という表題通りに、マルクスの原草稿探究の膨大な集積の本書が、本当に、「マルクスへ帰っているのか」どうか、疑問を呈さざるを得ないのである。

マルクスが「プロレタリアートの揚棄」こそ哲学の使命であると言明した、その揚棄すべき状況が「疎外」という哲学的概念によってとりわけ主題的に展開された草稿が、1844年のパリ草稿（『経済学哲学草稿』）、特にその第一草稿「疎外された労働と私的所有」の論稿である。このパリ草稿公刊後の研究史に触れる紙数はないが、大切な点は、「疎外」というキーワードが主題的に取り上げられた時期と場所がこの第一草稿に象徴されているのであって、マルクスの「疎外論」の展開がその時期と場所だけに限定されているわけではないということである。1845-6年の『ドイツ・イデオロギー』において分業から解放された労働^{xv}を提唱し、特に晩年の名著『資本論』において「共同の生産手段で労働する—自由な人々の連合（Verein）」^{xvi}を語り続けたように、マルクスの思索の中には、常に、現実の人間の解放と自由への志向が存在した。パリ草稿も、『資本論』も、それだけを単独で切り離して考えるのではなく、常に、この脈絡の中に位置付けられて考えるべきである。リュベルの主張「マルクスへ帰れ」の最重要な枢要点はここに存する。

さて、第一草稿の中では、「疎外」は次のように規定されている。…すでに我々は、労働者（後年には、さらに明確に、「労働力」として規定されていく）が「商品」（つまり「物件〈Sache〉・挿入筆者」）と化している、それをもっともみじめな商品と化していることを見てきた。我々の考察の前提は、「架空の原始状態」がどうなっていたのか、とか、そもそも「人間」は元々疎外されていたのか、とかというような思弁的なものではない。そうではなく、我々の考察の出発と前提は、あくまでも「国民経済学的事実」つまり現在の

資本制市場経済の現実であり、その中に置かれた賃金労働者の現状である。賃金労働においては、労働は商品を生産するだけではない。それは、自分自身を一つの（「労働力」という・挿入筆者）商品として生産する。まさにこの歴史的、社会的、階級関係を前提として労働の疎外が生ずる。ある特定の歴史的社会的条件と疎外とは切り離せない。すなわち、疎外とは、「労働が生産する対象つまり労働生産物が、一つの疎遠な存在として、生産者から独立した支配力（「物象的」 < sachlich > 力・挿入筆者）として労働に対してしている」事態、「（賃金）労働者の労働が、彼自身の外部に、自分とは独立に実在し、しかも自分に対立する一つの自立した支配力になる」（自立的な支配力を生み出す）事態として定義されるのである…と^{xvii}。ここで我々は、マルクスの考察が、あくまでも一定の歴史的現実の条件下のものであって、決して、超歴史的、神学的、普遍的な「疎外現象」を論じたのではないことに注意したい。明確にされているように、疎外は、自分自身の商品化、物件化（「物象化」）、あるいは、労働の産物でありながら労働自身からは「独立した支配力」へと労働生産物が転化する事態として把握されている。一部の論者が主張するような疎外論と物象化論の断絶説、物象化論による疎外論超克説（疎外論はマルクス自身によって棄却され、物象化論へと転換した）とは異なり、疎外と物象化とは常に、一体化されて（もちろん、両者の視角は異なるのであるが）概念把握すべきものとして設定されているのである。

さらに、マルクスは、疎外の第二の規定として、労働内部における労働の「自己疎外」という規定を下した後、疎外の第三規定として、人間の「類的存在」の疎外という点に着目する。類的存在とは、「人間は実践的にも理論的にも、人間自身の類をも他の事物の類を自分の対象とするからだけでなく、さらに…人間は、自分自身に対して、眼前の生きた類に対するように関わり、また自分に対し、一つの普遍的な、それゆえ自由な存在として関わる」^{xviii} ことを意味する。人間は、個々の物質的对象に対しても人間諸個人に対しても、単に、特殊個別の関係においてのみ関わるのではなく、常に、共同的、人類的な関係を媒介にしながら関わる。例えば、一つのものの生産や認識にはその

条件と背後に莫大な人類の労働と累積知との関わりが存在する。それは、単に、観念的理論的關係においてではなく、生産という労働行為においてである。「対象的世界の実践的産出、非有機的自然の加工、これらのことは人間が一つの意識的な類的存在であることの確証である。すなわち、人間が、類に対して自分自身の本質に対するようにふるまい、あるいは自分に対しては類的存在のようにふるまう一存在者であることの確証なのである」^{xxx}。

ここで注意すべきは、この第三規定は、現実の賃金労働における第一・第二の疎外規定を受けて、その結果として導出されたことである。疎外された現実の労働に対して、その反照、反省規定が考察される。つまり、現実の労働が疎外されているとすれば、では疎外されない労働はどうあり得るのか、という問題が提示され、現在の資本制という社会的条件を前提としつつ、労働の可能性として、つまり可能的本質としての「類的本質を確証する労働」という規定が導出されるのであり、決してその逆ではない。つまり、最初（「先験的」）に、疎外されない類的本質とそれを確証する労働の概念が理念的に先行定立され、その疎外態として、資本制下の賃金労働が反定立されるのではない。しかし、この人間の類的存在性とその本質性のみを強調して取り上げ、そして、他の疎外規定から切り離して第三規定を独立させ、あたかも、労働における類的存在、類的本質が人類の歴史上、実際にある原初期に存在し、その後の現実の歴史的展開に先行したかのように、そしてその本質の疎外態としてマルクスが歴史を考えていたかのような解釈も可能であった（いわゆる「疎外史観」）。もしも 1844 年段階でマルクスが実際にこのような考え方をしていたのならば、マルクスの疎外論ははまだ「ヘーゲルの本質論」や「フォイエルバッハの人間主義（ヒューマニズム）」の枠内にとどまっていると解釈する可能性もあり得る。現に、1844 年のパリ『経済学哲学草稿』と 1845-6 年の『フォイエルバッハ・テーゼ』『ドイツ・イデオロギー』とのあいだには決定的な「断絶」があるとする解釈（この用語とその考え方の典型が、ルイ・アルチュセールや日本の思想家廣松渉^{xxx}であるが）、いわゆる、疎外論棄却・超克説が、初期マルクス解釈史の中で一定程度の力を持ってき

たことも確かなのである。

本書張一兵著『マルクスへ帰れ』もまた、疎外論棄却・超克説による解釈論の典型を示す。次のような行文がそのことをはっきりと明示している。「(1844年草稿から次の段階への) この転換はゲシュタルト的な総体的転換であり、量的な漸進的過程にすぎないものではない。この時にこそ、マルクス・エンゲルスは、はじめて真の意味で科学的社会主義を打ちたてたのである」^{xxi}。「青年マルクスの『1844年草稿』において主導的な地位を占めていた人間主義的な疎外理論がマルクス主義的な科学的世界観ではなかったことを明確に指摘しておきたい。労働疎外論は、その本質上、やはり深層に隠された観念論的歴史観である。なぜなら、疎外理論は、伝統的な歴史人間学的な目的論と抽象的価値理論という定型化されたパターンを乗り越えていないからである」^{xxii}。1844年の疎外論において、マルクスはまだ、「フォイエルバッハの人間主義的疎外論」の枠内にあり、科学的世界「観」に、唯物論的の科学に、つまり真のマルクス主義に至っていない、というのである^{xxiii}。あたかも、二人のマルクスがいて、若き青年期1844年のマルクスはまだ真のマルクスになっていない、というのが張氏の解釈である。この理由、つまり、パリ草稿の労働疎外論が(ヒューマニズムという)「人間学的な目的論」や「抽象的価値理論」として解釈し得る理由として、張氏は、次のように説明する。「疎外理論は、(A) = 疎外されていない人間の真実の姿、(B) = 疎外された真実ではない人類の姿、(C) = 疎外の止揚を通じて回復された人間の真実の姿、という仮説を先験的に設定している…こうした仮説は、依然としてヘーゲル神学の枠組みの枠内にある。しかも人類主体の類の本質としての労働も、実質的にはやはり先験的で主観的な価値実体であることには変わりないのである」^{xxiv}と。

もしもマルクスの思想と叙述が、張氏の言うように、このような論理的思考ABCの順番通りであり、ヘーゲルの「精神」やフォイエルバッハの「人間の本質」のような「先験的(正しくは「超越論的」と訳すべきであろうが)」主体を前提とした「先験的」仮説を提示するものであったならば、張氏の主

張、そして一般的な疎外論棄却・超克説は当を得ていると言い得るのかもしれない。「疎外論」の論理は、論理的に第一に、疎外されない主体を定立し、その反定立、自己疎外として、疎外された歴史的現実を提示する転倒した論理（「論理の本質倒置論」^{xxv}）であるというように。しかし1844年の草稿の思索の中でマルクスが立脚し、その探究の立場としたのは、あくまでも、現実の資本制社会の現実とそこでの商品化された賃金労働であったことは、すでに見たとおりである。従って、そこでのマルクスの思索が「先験的」な主体を前提として「先験的」仮説を立てたという張氏の解釈は、マルクスに対して妥当しない。パリ草稿の一、二年後の『ドイツ・イデオロギー』においてマックス・シュティルナーを批判する中で、マルクス自身がこのように「先験的」主体を定立する哲学者たちの抽象的思弁的思考態度を痛烈に批判する行文を書いている。彼らは、「歴史には唯一の行為する主体として『人間なるもの』^しがいると誣い、『人間なるもの』が歴史を作ってきたと信じ続けている」^{xxvi}と。その一文に続けてさらにマルクスは、自分はすでに『独仏年誌』の時代（1843年代）に（「ヘーゲル法哲学批判」「ユダヤ人問題によせて」の中で）、「無前提的（抽象的思弁的・挿入筆者）な見方ではなく、現実的な物質的諸前提そのものを経験的に観察するところの、またそれゆえに初めて現実的に批判的な世界の見方への道を拓いた」と述べている^{xxvii}。『独仏年誌』の時代にすでにこのような自覚を持っていた（と回顧する）マルクスが、その自覚に反し、その後の1844年の草稿で、「先験的な主体を立てる先験的論理」を自ら自覚的に展開するはずがない。

もちろん、1844年の草稿の中で、いまだ「人間的本質」や「類」というような「伝統的に紛れこんでいる哲学的表現」が多く使われていたことは確かである。マルクス自身もそのことを自覚していた。その結果、張氏が指摘するように、「疎外」「類的存在」「自己疎外」という用語は、1845年以降『リスト評注』や『ドイツ・イデオロギー』の中では、急激に消失していく。しかしそのことをもって1844年の疎外論そのもののテーマとプロブレマティークをマルクスが棄却した、あるいは物象化論へと超克したという解釈は当

たらない。まして、1844年の疎外論を「先験的な類の本質－労働から出発して、社会の歴史を人間の本質の疎外と回復の過程という人間主義的な隠された観念論的歴史観の枠組みの中で見る歴史観」^{xxxviii}「先験的な主体から出発する人間主義的な疎外史観」^{xxxix}と決めつけるのは妥当でない。張氏の姿勢は、マルクス自身の考察と自覚に即してマルクスの原資料を読むのではなく、1845年以降のマルクスに至って初めて、「マルクス主義哲学、すなわち史的唯物論」^{xxx}つまり「マルクス主義的な科学的世界観」^{xxxi}に至り、そこでマルクスは初めて真のマルクス（「マルクス主義」）になる、それまでのマルクスはまだ真のマルクスではないという自らの（あるいは「マルクス主義」の）裁断に基づいて1844年の草稿を解釈しようとする姿勢である。〈疎外〉という用語は、確かに歴史一般を構成し、且つ説明する概念としては1845年以降、使用頻度が少なくなる。しかし、我々は、まさにマルクスの最後の主著『資本論』（1867）の中に、資本と賃金労働との現実的社会関係（機械制大工業における関係）を構成するキー概念として〈疎外〉概念が登場するのを見る。「資本主義的生産様式は労働条件にも労働生産物にも労働者に対して独立化され〈疎外〉された姿を与えるのだが、この姿はこうして機械によって完全な対立に発展する」^{xxxii}。さらに、『剰余価値学説史』の一文では、ヘーゲル的な〈自己疎外〉という概念が使われる。「この賃金労働は自己疎外された労働であり、それに対しては、それによって作り出された富が他人の富として対立し、それ自身の生産力がその生産物の生産力として対立し、その致富が自己貧窮化として対立し、その社会的力がそれを支配する社会の力として対立する」^{xxxiii}。「自己疎外」という1844年草稿を連想させるような表現形態は、決して抽象的、理念的な概念としてではなく、逆に、現実の機械制大工業化の賃金労働の概念として明示されている。さらに、注意すべきは、最後の主著である『資本論』においても、〈疎外〉と〈物象化〉が別のものでなく、同一事態を異なった視角で表す一体化された概念として論じられていることである。「ますます資本は資本家をその行使者とする社会的な力として現れ、この力は一個人が作り出せるものに対して

は、もはや考え得る限りのいかなる関係も持たないのであり、——しかもそれは疎外され、独立化された社会的力であり、この力が物象 (Sache) として、またこのような物象による資本家の力として社会に対立するのである」^{xxxiv}。疎外された力がまさに (資本という) 物象として独立した支配力をふるい、本来の社会的主体であるはずの労働者に対してその支配力を行使するというように、疎外と物象化は一体化されて論じられているのである。このような『資本論』の行文は、疎外論が物象化論によって超克され、棄却されたという主張を反証する。

さらに、すでに初期 1845-6 年の『ドイツ・イデオロギー』(つまり 1844 年草稿のすぐ次の段階、疎外論超克説によればマルクスは疎外概念を棄却して物象化概念へと転換したとされる段階) において、マルクスは疎外と物象化とを一体化して論じている。マルクスは当時自分たちに与えられた課題を次のように設定する。「現実的な諸個人を彼らの現実的な疎外と、この疎外の経験的な諸関係において叙述すること」^{xxxv} と。そして、「このような個人的利害の階級的利害への独立化のうちで、個人の人格的ふるまいは物象化され疎外されずにはいられないし、また同時に、個人から独立な…力 (マハト) として…一連の力に転化するが、それはどうしてなのか」という問いを提出する^{xxxvi}。つまり、労働疎外と私的所有との関係の解明が 1844 年草稿のテーマとプロブレマティークであったのに対して、『ドイツ・イデオロギー』での彼らの課題は、それではその疎外の原因と条件は具体的には何か、という回答へと向かうことであった。それは疎外論の深化であり、また、別の側面からの視角の多角化であって、棄却や超克ではない。そこでは次のように問われ、そして次のように答えられる。「彼ら諸個人の諸関係が彼らに対して自立化するということ…が一体どこから生じるのか」との問いに対して、その回答は「それは分業からである」^{xxxvii} と。張氏は、この問いと回答の提示に関して、「この分業が元来の人間主義的言説である疎外規定に取って代わった」と解釈し、「疎外は哲学論理的規定であり、分業は経済学的な実証概念である」から、この時点でマルクスは「哲学的批判」から「科学的実証的

批判」つまり科学的マルクス主義へと転換したのだと裁断する^{xxxviii}。しかし、すでに我々が見たように、マルクスは、『資本論』自体においても、現実の機械制大工業の賃金労働に関して〈疎外〉や〈自己疎外〉というキー概念を手放すことはなかった。だとすれば、疎外と物象化とは、片方が片方によって棄却されたり超克されたりする、あるいは一方が一般的抽象概念、他方が具体的特殊概念として、一方が片方を包摂する、というようなものではない。張氏は、「マルクスへ帰れ」という標語を立てながらも、実際には、マルクス自身とは異なる裁断を行う。疎外は物象化によって棄却、超克され、分業や生産力・生産関係という用語と概念による歴史構成こそが真のマルクスであるという自らの立場（これが「マルクス主義」だと言うのだろうが）によってマルクスを解釈しているのに他ならないのである。

しかしすでに見たように、マルクスにおいて、疎外と物象化は常に一体的な両面を成すものとして提示されていた。すなわち、物象化とは、「私的諸個人相互の社会的関係行為の中から、いかにして彼らから自立化し、彼らを支配する非人格的＝ザッハリヒ（物象的）なシステムが形成されるのか」という、社会システム形成の客観的視角から見た概念であるのに対して「疎外論は、物象化されたシステムの運動過程を構成する私的諸個人の生活行為として捉えなおしてゆく方法…主体分析の方法」である^{xxxix}。両者は、常に相まって成立する。もちろん、マルクスの叙述の中では、最初は用語としての「疎外」が、その後は、「分業」「生産力・生産関係」「物化」「物件化」の使用頻度が上昇した。しかしそれは、内実と内容の深化、あるいは主体と客体との間の視角移動であって、張氏の言うような「人間疎外史観（人間主義）」（科学以前のマルクス）から「科学的マルクス主義（唯物史観）」への転換を意味するものではない。それは、解釈者自身の裁断をマルクスにあてはめたものに他ならない。真に「マルクスへ帰る」とは、マルクスが、最初から自らに課した思想課題、人間の解放と自由への変革の志向性と意思、まさにこの点に沿って、マルクス自身の原思想を追体験することに他ならない。そのようにマルクスは読まれなければならない^{xl}。科学以前のマルクスと科学の

マルクスとに分断することは、彼自身の真意に反するのである。

< 本文注釈 >

- i *Rubel on Karl Marx, Five Essays*, edited and translated by Joseph O'Malley, Keith Algozin, Cambridge Press, 1981. 角田史幸訳『マルクスへ帰れ』こぶし書房、2010年。
- ii 同訳書 38 ページを参照。「マルクス主義はエンゲルスの上に抱かれたものであり、マルクス主義、そしてエンゲルスからも離れて直接にマルクスへ帰れ」と主張される。エンゲルスにとっては世界を一挙に説明する法則であった歴史把握の方法は、マルクスにとっては単に、歴史社会探究の「導きの糸」に他ならなかった（『経済学批判』序言を参照）。
- iii 張一兵著『マルクスへ帰れ』中野英夫訳、情況出版、2013年、iii ページ。
- iv 同上。
- v 同上。
- vi 同上。
- vii 同書、v ページ。
- viii 同書、xxviii ページ。
- ix 同書、xxiv ページ。
- x 田畑稔『マルクスと哲学—方法としてのマルクス再読—』新泉社、2004年、4 ページ。
- xi 『レーニン全集』大月書店、第14巻、9 ページ。
- xii マクシミリアン・リュベール、前掲書、邦訳 43-6 ページを参照。
- xiii Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 1, S. 391. 以下、全集を MEW. と略記。
- xiv 「フォイエールバッハに関するテーゼ」、MEW. Bd. 3, S. 535.
- xv 『ドイツ・イデオロギー』、MEW. Bd. 3, S. 33. 『ドイツ・イデオロギー』に関しては、諸版が存在し、それぞれの妥当性についても多くの議論があるが、本書評は紙数の関係上、位置のみを明示するために、誰もが即時に確認し得る MEW. にお

ける位置を示した。

xvi MEW.Bd.23, S.92.

xvii 『経済学哲学草稿』、MEW.Bd.40,S.510-3.

xviii MEW.Bd.40,S.515. 訳文は適宜変更してある。

xix MEW.Bd.40,S.517. 訳文は適宜変更してある。

xx 廣松渉『マルクス主義の地平』勁草書房、1969年等を参照。『ドイツ・イデオロギー』以降の物象化論による疎外論の棄却という解釈の典型が示されている。

xxi 張一兵著、前掲書、7ページ。

xxii 同書、227ページ。

xxiii 同書、6-8ページ。

xxiv 同書、228ページ。

xxv 同書、466ページ。

xxvi MEW.Bd.3,S.216.

xxvii MEW.Bd.3,S.217-8.

xxviii 張一兵著、前掲書、7ページ。

xxix 同書、270ページ。

xxx 同書、20ページ。

xxxi 同書、227ページ。

xxxii 『資本論』第1巻、第4篇相対的剰余価値の生産、第13章機械と大工業、MEW.Bd.23,S.455.

xxxiii 『剰余価値学説史』、MEW.Bd.26- III ,S.255.

xxxiv 『資本論』第3巻、MEW.Bd.25,S.274.

xxxv MEW.Bd.3, S.262.

xxxvi MEW.Bd.3, S.227-8.

xxxvii MEW.Bd.3, S.75-6.

xxxviii 張一兵著、前掲書、465ページ。

xxxix 物象化論と疎外論の関係については、平子友長『社会主義と現代世界』青木書店、1991年、201-2ページを参照、引用。

張一兵著『マルクスへ帰れ—経済学的コンテキストにおける哲学的言説—』 161
(中野英夫訳、情況出版、2013年)

xi マルクスの各期の諸思想を一人の人間のものとして総体的に把握すること、これがリュベルの主張であり、それが「マルクスへ帰る」ことである。

(つのだ ふみゆき・教授)